中國知識人の選擇

——蕭乾の場合——

丸山昇

蕭乾（一九一〇―　）は、日本では最近まで研究・評論はもちろん、翻譯・紹介さえあまりなかった文學者である。[1] 中國でも、特に一九五七年に彼が「右派」とされて以來、ほとんど論じられることがなかった。文革前に出た作家別の研究文獻目錄の類にも、ほとんど彼の項は見られない。

最近の中國では、若い讀者・研究者の人氣が、從來輕視されていた作家たちに集まり、魯迅・郭沫若・茅盾等には、過去の反動からか、一部に反撥がある、ということもいわれている。その場合、從來輕視されていた作家の例として、よく名をあげられるのが、徐志摩・戴望舒・郁達夫・沈從文・錢鍾書・蕭乾等である。

歷史がある轉換點を通過した時、それまで輕視されて來たということが、それ自體で人々の注目を集める理由となり得るのは、人間の自然な本性に根ざすものであろう。しかし、それが往々にして、過去の歷史の裏返しになり終る例も、我々が從來見なれてきたものである。ここでは例を蕭乾に限るが、彼を非ないし反左翼文學とする成見が先行して、彼の精神の軌跡を內在的にたどることがおろそかにされるならば、それは彼を「右派」として否定して來たかつての中國の見方の裏返しに終り、彼の文學をそれに卽して理解する道をかえって遠ざかる。[2] それは、むしろ彼の歩んで來た道とその文學が、今日の中國に對して持つ意味を失わせることにもなる、と私は考える。

こういう角度から蕭乾の足跡を見なおすと、そこに見られるのは、まぎれもなく中國近代の知識人としての問題に直面しながら、二十九歲から三十六歲まで、しかも抗日戰期をほとんどヨーロッパで過した點で、やや獨特な體驗を經て來た、一つの型ともいえる精神のありかたであり、そのありかたを檢討することは、自ら中國近・現代の精神史[3]をより重層的・立體的に見なおすための一つの手がかりを與えるものである、と思われる。

ただ、紙數に限りがあり、また蕭乾についてすでに提供されている材料が十分とはいえない現狀で、說明不足になり、抽象的な言葉の一人歩きになることを避けようと思うと、彼の精神の軌跡を今ただちに全面的に論ずることはできない。本稿では、そのある時點での選擇に限定してとり上げることを通じて、問題を考える手がかりを探りたい。[4]

一

「一九四九年初め、私は生命の一大十字路に立って、自分と一家の

運命を決する選擇を行った」

と、一九七八年に蕭乾は書いている。[5] 四九年、いうまでもなく、中華人民共和國成立の前夜である。「四九年初め」というのは、「年表簡編」によれば三月。當時蕭乾は、香港『大公報』の仕事に參加する一方、英文誌『China Digest』（中國語名『中國文摘』）の編譯にも秘密に參加していた。『中國文摘』は、「地下黨の對外宣傳出版物」だった。[6] 蕭乾は、すぐ續けて、こう書いている。

「が實は、前年にこの選擇はすでにすませていたのである。家庭がこわれた後、私が急いで上海を離れようとしていた時、ケンブリッジから手紙がきた。大學が中文系を作ろうとしている、私に參加して現代中國文學を講じて欲しい、という。當時私はすでに新聞革命（原文「報紙起義」）の前奏だった學習會に參加しており、政治的には眞暗闇の中に一すじの曙光がほの見え始めていた。また國外で七年も漂泊生活をしたし、實際もう出たくなかった。楊剛に勵まされて、斷りの返事を書いた」

家庭がこわれ云々は、「年表簡編」では四七年十一月に「家庭關係が惡人に破壞されて强いショックを受け、急いで上海を離れようとした……」とある。[7]『大公報』の「起義」は四八年である。その中心になったのが楊剛等だった。香港『大公報』だけが上海の同紙に先んじて「起義」したため、この後一時『大公報』は上海が國民黨支持、香港が中共支持という狀態になる。楊剛とは、一九〇九年生まれの女性の作家、ジャーナリスト。燕京大學卒業、北方左連の活動に參加。三九年蕭乾渡英の後を受けて『大公報、文藝』（香港）の主編となり、重慶・桂林版も主編を續けた。四四年渡米、四八年歸國、香港『大公報』を變革した後、四九年九月の中國人民政治協商會議に新聞工作者代表として參加、その後周恩來に高く評價されてその主任秘書をつとめ、さらに五四年からは黨中央宣傳部國際宣傳處と『人民日報』で對外宣傳の責任者となったが、五五年交通事故にあい、その後遺症から五七年死去した。[8] 蕭乾は、二九年冬、米國人女性教授 Boynton の家で開かれていた英詩朗讀會の席で彼女を知り、以後「一生の重要な問題で彼女の援助を受けた」（『楊剛文集』後記）。

太平洋戰後の內戰の歸趨がようやく定まろうとしていた時、國內にいた老百姓は、かりにこの革命を歡迎しない者でも、その現實の中で生きる術を求めるしかなかったろうが、知識人とくに國外にいた人々にとっては、そのほかに、恐らく臺灣に脫出するであろう國民黨と行動をともにするか、あるいは他の外國に安住の地を求めるか、少なくとも二つの選擇肢があった。當時多くの人々が國民黨の腐敗に愛想をつかしていたにしても、後者の選擇肢は、かなり大きなものであり得ただろう。「自分と一家の運命を決する選擇」というのは、それを指している。

ところで、すぐ後に、「實は前年にこの選擇はすでにすませていた」と書くのに、冒頭に四九年のこととしてこの文章を書き起したのは、四九年にもう一度あったチャンスを敢て捨てたことの意味、その時に彼の前に置かれた選擇肢が、より大きいものとして記憶されていたこと、あるいは七九年の時點でふり返った時、四九年の選擇が持った重さを、あらためて確認した、ということだったのだろう。

その選擇とは、むろん、ケンブリッジ大の招聘に應ずるか、新中國建國に參加するか、ということだったが、その選擇肢を構成していた因子はどういうものだったのか、蕭乾は續けてそれを語っている。

四九年三月のある日、九龍花墟道の寓居で、『中國文摘』の原稿に

手を入れていた蕭乾を、ケンブリッジ大中文系のハルーン（Gustav Haloun）教授が訪れる。息を切らして階段を上って來た彼は、お茶を一杯すすると、香港には二つの使命を帶びて來たのだ、といった。一つは大學のために中文の書籍を買い入れること、もう一つは、「君と君の家族をケンブリッジに迎える」ことだ、という。彼は前年の招聘を蕭乾がすでに一度斷ったことを承知の上で、あの時の中國（蕭乾は「彼が指していたのは白色の中國だった」と括弧内に注記している）はまだ今日のような危機（同じく「平津戰役後の國民黨總崩れの局面を指す」と注記）に陷っていなかったからのことで、こうなった以上もう一度考えなおすだろうとふんでいたのだった。

「しかし當時彼のいう『危機』こそ正に私及び全中國人民が渇望していた黎明だった。私は率直に彼にこう告げた。私は中國で生まれ育った中國人であり、中國は今再生しつつある、私はこんな時期に中國を去ることはできない」

しかし、二、三日後、ハルーン教授がまたやって來る。この「階段を上るのが何より苦手な老教授」は、今度は大學を代表してではなく、「共産黨のことを少し『理解』している古い友人として」蕭乾に忠告に來たのだ、といった。彼があげたのは、戰後の東歐の一連の事件だった。マサリークの死が不審であること、ハンガリーにもミンドセンティ樞機卿事件が起ったことなどをあげ、要するに西洋で學んだり仕事をしたりしたことのある者は、共産黨政權下では最後は不幸になる、「インテリと共産黨の蜜月はとても長くは續かない」と說いた。そして明日の今ごろまた來るから、といい殘し、蕭乾が「私の考えは變りませんよ」というのにも耳をかさずに歸って行った。

見方によっては、蕭乾や當時の中國知識人の考え方をまったく理解しようとせぬ强引な押しつけとも見える、ハルーン教授の像を、蕭乾はむしろ好意的に描いている。

ハルーンは、チェコ出身で英國籍を取得した中國學者だった。蕭乾は三九年にロンドン大學東方學院中文科の講師に招かれ、十月ロンドンに着くが、當時同學院はドイツの爆擊を避けてケンブリッジ大學に疎開していた。彼は四〇年同スクールとともに一旦ロンドンに戻った後、四二年同スクールを辭し、ケンブリッジ大皇家學院（キングス・カレッジ？）の大學院生となり、イギリスの心理主義小說を專攻するが、翌四三年修士論文執筆中、中國訪英友好代表團の一員として來英した『大公報』社長胡霖に、學位は捨ててジャーナリストに徹し、第二戰線開設後のヨーロッパ戰線に行くよう强く勸められて、六月、ケンブリッジを離れる。

ハルーン（蕭乾は「魯迅の名さえ知らない『詩經』學者」と書いている）は、蕭乾がケンブリッジにいた時期を通じて、終始彼に友好的だった。蕭乾はよくハルーンの家を訪れてお茶を飲み、いっしょにクリスマス・イブを過ごしたこともあった。ハルーンは二十ポンドの七面鳥を切りながら、「詩經」中の「之」の用法を語った。食事が終ると、かつてベルリン・オペラの名歌手だった夫人が自らピアノを彈きながら歌った。彼女に導かれて西洋クラシック音樂に夢中になった、と蕭乾は書いている。

ハルーンがあげたマサリークの死とは、四八年の「チェコ二月革命」[9]直後の三月十日、外相だったヤン・マサリークが執務室の窓から墜落死したことを指している。第一次大戰を契機にしたチェコ獨立運動の指導者であり、一八年成立したチェコスロヴァキア共和國初代大統領で、いわば「建國の父」だったトマス・マサリーク（一八五〇—

一九三七）の息子で、二月革命の際ベネシュ大統領とともに調停者として働いた彼の突然の死は、さまざまな疑惑や臆測を生み、共産黨による謀殺説もあった。

またハンガリーのミンドセンティ樞機卿事件とは、四九年一月、ミンドセンティが叛逆罪で逮捕された事件である。當時西側では、宗教に對する社會主義政權の彈壓として取り上げられていた。[10]

ハルーンが、マサリークとミンドセンティの事件をあげたのは、當時の西側における非社會主義ないし反社會主義的知識人の常識的見解を示すものだったろう。このような見解を持って、蕭乾に「忠告」したのは、ハルーンだけではなかった。「西方には一人のハルーンがいただけだが、東方のハルーンは一人だけではなかった」と、蕭乾は續けて書いている。ある者は、ダレス弟の『スターリン傳』とくにその三五年の肅清の項を讀めと勸めたし、蕭乾のための「參謀」役を買って出るものもあった。社會主義中國に入って行くのは簡單だが、出て來るのは難しい。延安に古い友人がいるにしても、君がやっつけられる時になれば、古い友だちであればあるほどよけいに發言せねばならなくなる。現在では香港で大物黨員たちと友だちづき合いをしていても、彼等が高官になってその下につくことになれば話は別だ。不當なめにあっても、國會放火事件で無罪を主張したディミトロフのようにいいたいことをいわせてくれはしないし、ドレフュスのような事件にぶつかっても、誰もゾラのように辯護を買って出てはくれない。彼等はこういい、さらに、上策はケンブリッジの招聘を受けて、將來できれば客人として歸って行くことだ、共産黨の客人となるのは幹部となるより快適だ、といった。中策は、半分客人となること、すなわち暫く香港に留まって仕事をすることを要求することだ、そうすれば、現在の生活方式を保持しながら一定の禮遇も受けられる、そして一方で靜觀して考えることだ。「どうせ君のように燕京を卒業したうえに外國に七年もいた人間は、スパイ、特務とされないまでも、『洋奴』と罵られずにはすまない。」これが「參謀」たちの忠告だった。

二

後に見るように、これらの忠告は、蕭乾がその後中國で體驗することになった事實を、ある面でいいあてていた、ということができる。というより、逆に、そうした體驗をなめた後で、蕭乾の記憶の中から特別の生々しさを持つ言葉として選擇されたものが書かれている、という方が正確かも知れない。しかし、それは、蕭乾がその後の體驗に合わせて、過去の恣意的な再編成を行った、ということではない。マサリークの死については、彼はほとんどその直後に、「J・マサリークの遺書に擬して」[11]という文章を、雜誌『觀察』に書いている。この事件は、彼にとってハルーンや「參謀」たちに指摘されるまでもなく、強い關心の對象だったことがわかる。しかもそれはジャーナリスト蕭乾の關心を惹いたというだけでなく、後に見るように、彼自身の内面にも通ずる問題だった。

そもそも、英國を中心に七年の歐米生活を送って來た蕭乾にとって、マルクス・レーニン主義あるいは國際共産主義というものの像は、もっぱら國内で中國共産黨ないし毛澤東を通じて見ていた人々にくらべて、もっと複雜な影を持ったものとして認識されていた。

三〇年代中期には、彼も中國の他の知識人同樣、

「おぼろげにソ聯に對して天國に對するようなあこがれをいだいていた。英米の商人が政府の默認の下でわが國を侵略する日本にガソ

リンと砲彈を運んでいる時、ソ聯の飛行士は我々の抗戰を援助していた。當時、ソ聯は正義と多くの美しい理想の化身だった」[12]

と、蕭乾は『選集』の序に代えて書いた「ある樂觀主義者の獨白」で書いている。文中のソ聯の飛行士とは、抗日戰初期、主に武漢防衛戰當時E一五、E一六戰鬪機等を持って參加した「正義の劍」となのるソ聯顧問團、義勇隊を指す。[13]

しかし、三九年秋、彼がロンドンに着いた時、西歐・北歐は反ソ熱の高揚のさなかにあった。獨ソ不可侵條約（三九・八）、第二次大戰開始（三九・九）、獨ソによるポーランド分割占領（三九・九）と續いた歷史的事件が、西歐・北歐の文化・思想界に衝擊を與えていたのである。

「かつてソ聯を訪問した、またスペイン内戰に參加したことのある左翼人士が、新聞紙上に大量の反ソの文章を書いたが、そのうちもっとも多くまたもっとも具體的に書かれたのは、三〇年代中期の肅清の擴大だった。當時、私の心の中で天國の像に一抹の影がさした」（同前）

つまり、蕭乾にとって、スターリンの肅清の話は、四九年にハルーンにいわれるまでもなく、三〇年代當時すでに耳にしていたものだった。蕭乾が中國の知識人の中で、やや獨特の思想形成・思想的遍歷を經ている、と私がいうのは、このような、三〇年代四〇年代において、西洋の知識人が體驗した思想的激動を、程度の差こそあれ、現場で同時代人として經驗しているところに注目するからである。

さらに蕭乾は、「獨白」で、當時の西歐の思想狀況の一面について、こう書く。

「當時私を困惑させたことは、イギリス共產黨の戰爭に對する冷淡——あるいは消極的反對だった。三〇年代を通じて、全世界の進步的人類は胸いっぱいの義憤を懷いて樞軸國に反對していた。私もかって仲間たちと上海の弄堂で大聲で『マドリッド防衛の歌』を歌ったことがある。ヒトラーはチェコを併呑した後、さらに貪婪にその血のついた口をポーランドに向けた。一九三九年、戰爭——なかなかやって來なかった反ナチ戰爭が、ついに爆發した。が、かつて反ナチ運動の最前哨に立っていたイギリス共產黨はむしろ拱手傍觀し、さらには清教徒の反戰デモに參加さえしていた。私は苦悶した、不可解だった。私と非常に仲のよかったあるイギリス共產黨員は私以上に苦悶していた、大きな息さえつけないほど縛られていたからである。戰爭の話になると、彼は苦しげに首を振り、何とか避けようとした。私は絕えず疑問に思っていた、全世界がロシアを愛しているのに、どうして他の人々が自分の祖國をも愛することは許されないのだろう」（同前）

第一次大戰當時の「祖國防衛」のスローガンが、第二インターナショナルの「裏切り」の標幟とされ、帝國主義戰爭に對する共產主義者の正しい態度は「帝國主義戰爭を内亂へ」であるべきだとしていた、コミンテルンの傳統的思考方法と、第二次大戰がナチを敵として始まった事實との間に狹まれ、しかもそれにソ聯がナチ・ドイツとともにポーランドを占領したという事實が加わり、どういう態度をとるべきか決しかねていた西歐コミュニストの「困惑」がここにとらえられている。それに對して、右の文章の末尾部分に見られるような比較的明確な批判を蕭乾に持たせたものは、彼が中國人だったこと、すなわち祖國が帝國主義國ではなく、現に日本の侵略にさらされている中國だったこと、つまり祖國擁護と反帝・反ファシズムの間に矛盾を感じな

いですむ立場に、最初から置かれていたことだった。

西歐のコミュニストの右のような困惑は、四一年六月、ナチ・ドイツが突如ソ聯侵攻を開始したことで「解決」する。「私のそのイギリス共産黨の友人はたちまち奮い立った、戰爭の性質が一夜の間に帝國主義戰爭から反ファッショ戰爭に變ったからである」と、蕭乾は書いている。イギリスについて見れば、六月二十二日、チャーチルがラジオ放送でソ聯を同盟國と呼び、ソ聯援助を提起する、といった變化も起っていた。

獨ソ戰におけるドイツ軍優勢という情勢のもとで、西側内部の左翼は、「第二戰線」要求の運動に力を入れた。「良識ある人々はみな世界の曙光はやはり東方にあり、そこにこそ何億人民の希望が寄せられている、と感じていた」（同前）と蕭乾はいう。誤解のないよう蛇足を加えておくと、この場合の「東方」とはもちろんアジアではなくソ聯を指す。一人の外國人だった蕭乾も、イギリス共産黨の組織した第二戰線促進のための「國民大會」に參加し、集まった民衆とともに「インターナショナル」を歌い、「感動して涙を流した」。翌日彼はイギリスの私服警官の婉曲な尋問を受け警告されている。

西歐のコミュニストの困惑は、情況の變化によって一旦解消はしたものの、その根本にあった國際政治の複雜さ、その中でのソ聯外交政策の矛盾が解消していなかった以上、やがて困惑がまたやって來る。

「しかし戰爭末期、とくに混亂したイタリア政局の中で、私はソ聯の外交が革新の原則よりもはるかに民族の實利を重んじていることを驚きをもって眼にした。（當時私はヤルタにおける人を失望させるあの取引きをまだ知らなかった！）」（同前）

イタリア政局というのが具體的に何を指しているかはわからないが、ここにいう傾向はイタリアにとどまらなかったはずである。この認識が世界のコミュニストないし左派の中で常識となるのは、まだ大分後のことだが、國際報道の第一線にいて[18]、西側の報道に觸れる機會も多かった蕭乾であってみれば、右の言葉は後からこしらえたものではないと見てよいだろう。

「J・マサリークの遺書に擬して」に、我々はこういう體驗を通って來た蕭乾の、當時の思想・精神のありようを見ることができる。彼は、西側でいわれていたような共産黨の謀殺說はとらず、また單に共産主義者の獨裁の陰謀の犧牲者ととらえるのでもなく、かといって當時の左翼にあったと思われる、歷史の發展について行けなくなったブルジョアあるいは小ブルジョア政治家の死にすぎない、といった見方とも違って、マサリークにある種の感情移入を行っている。そもそもその遺書の形で文章を書こうとすること自體、一種の感情移入を示しているだろうが、内容全體も、その性格が色濃く現れているといえるものである。

「さらば、親愛な兄弟たち」で始まるこの「遺書」は、先ず自分の死に加えられるであろう說明のうち「神經異常」を否定し、さらに君たちはとりわけ魯斯先生（未詳）の言葉を信じて共産黨が私を窓から突き落したのだと疑ってはいけない。彼らが自ら聯合政府をぶちこわし、各地の戰爭好きの政治家たちに口實を與えるほど愚かであり得るだろうかと書いた後、その心境をこう述べる。

「人が自分の國をあまり長く離れているのはよくない。ベネシュ大統領に從ってロンドンに亡命していた頃、私は自分が代表しているのはチェコ人民の利益だと信じていたのだが、私はあの七、八年のチェコから、やはりズレていたのだ。あの期間に憎しみがどう育っ

ていたか私は知らなかった。ともに天を戴かぬところまでそれが育ってしまっていることも。あのころ、民主國家が永遠に同盟して行くという甘い夢を見ていたのは、この私だけではなかったはずだ。たくさんの識者がヨーロッパの首都を往來して奔走したではないか。人民の血を大切に思わない者がいるだろうか。十年間辛い戰爭をして來た世界に少しの休息が必要だと思わない者がいるだろうか。誰が世界を二つに分けて、フランコの類の屍を生き返らせたいと願うだろうか。スティヴンソンもデーヴィスもスターリンも常に世界は併存を許すと表明しているではないか。米國がニュー・ディールを施行して以後、人類生活の社會主義化はもはや動かぬ形勢になり、資本主義はとうに白旗を揭げた。サンフランシスコ會議からもどった時、英國保守黨の空前の慘敗を眼にして、私はヨーロッパの進歩・光明のためにどんなに熱い希望をいだいたことか。多くの人々と同樣、私はヨーロッパに無血革命が來るだろうと妄想していた。

……原子爆彈とその後に續く原爆外交が出現すると、兩極化の大勢が完成してしまった。二、三年前の盟友が、今日では敵になり、二、三年前神聖な〝是〟であったものが、今日では許すべからざる〝非〟となった。英國のベヴァンは死ぬ必要がない、彼は始めからこの不幸を見通し、しかもすでに〝適應〟したのだから。チトーとマリノフスキー（不詳）も死ぬ必要がない、彼等は終始河の一方の岸に立っているのだから。だが私は夢想家だ。私の父トマスの夢想は完成した、あの頃の世界は複雜に錯綜しており、單純に兩極化してはいなかったから。……私はあまり聰明ではないが、自分の力の限界は知っている。平和には橋が必要だが、殺し合いの時にはそれは使えない。今日は考えること、猶豫することは許されない、コートを脱いで戰團に身を投ずる時なのだ——どちらの側に投ずるにせよ、私の生活よりも有意義だろう。私の死は一つの政治哲學の行きづまり、一つの平和の理想の崩壞であり、協調の道が行き止まりであることの承認なのだ。

……現在全民族が眼を見開いて選擇すべき時にある。左右に對して私は同時に一言耳に逆らう忠告をしておきたい。たとえ一時の私怨をはらしたにせよ、テロに近いデマ攻勢が成功したにせよ、やはり失うものは得るものより小さい。なぜならそれが生み出すものはせいぜい恐ろしい凶惡な顏であり、その役割は警戒心を植えつけることでしかない。デマをとばす者たちのいうとおりにならせぬために、自己に忠實であるために、人としてのいささかの氣慨を守るために、攻擊された人もさっさと逃げてしまうことはできない。君たちが代表しているのは科學的精神ではないか。君たちは正義の側に立っているではないか。それにあのもっと強力なもっと人を心服させ得る武器を持っているではないか。今日〝左翼〟あるいは〝右翼〟であることだけでなく、〝人間〟としての原則は、長期的に見れば、なお保持するに値する。

……それ（窗外の廣場の鐘）はオーストリア・ハンガリーの植民地だったチェコを見たし、ミュヘン前後のチェコを見、八年の占領を經て、新しいチェコも見た。そしてまた一人のチェコ人の死も見ることになる。しかしそれは終始カーン・カーンと鳴り續けるだろう。祖國チェコが時間の如く永遠であることを。チェコ人民に祝福あれ」

長くなったが、蕭乾の當時の氣分を表わしていると思われるこの文章の、ややパセティックな調子を正確に傳えようと思うと、なかなか

途中省略し難かったからである。

この「遺書」がマサリーク自身の思想をどのくらい代辯し得ているかは、この場合問題ではない。[19] ここで見ておく必要があるのは、蕭乾が、四八年四月という時點で、かつて社會主義の必然性を信じ、ヨーロッパの無血革命を「夢想」し、そして今、その「政治哲學」「平和の理想」の挫折を承認しつつ、なお左右兩派に對して「耳に逆らう忠告」として「人間としての原則」を說く人物を設定し、そこに自己の分身を見ていた、言いかえれば、そういう人物の「遺書」に自分の思いをこめた、という事實である。蕭乾自身、この文章について、「それは私が苦悶の一九四八年（家庭悲劇が起って間もなく）、自分のために書いた告白であり、當時の心境の自畫像である」（「獨白」）といい、『選集』では、これを「自剖」としてまとめられた、一連の序跋・回想記群の中に入れたのである。

三

こういう蕭乾にとって、ハルーン敎授の忠告は、やはりある種のリアリティを持って迫って來る性格のものだったろう。しかし、彼はそれらを知った上で、なおかつ新中國の建國に馳せ參ずる道を選んだ。「往事三瞥」は、これまで見て來たハルーン敎授その他の忠告にもかかわらず彼が敢て歸國の道を選擇したことを第三話とし、過去の三つの記憶を第一、二話として、その全體が彼の「選擇」の根據を明らかにするように、オムニバス形式で構成された作品である。

第一話は少年時代の話。當時の北京では特に冬季「行き倒れ」の死體を眼にすることがよくあった。作者はある日、日ごろのものとは違う死體を眼にする。ある白系ロシア人の死體だった。作者の住まいの近く、東直門近くの北京の東北隅にギリシア正敎の敎會があり、乞食同然に落ちぶれた白系ロシア人たちがここに多數集まっていた。その死體を見る二、三日前のある朝、貧民に粥を施す「粥廠」に並んだ作者は、死體の主である白系ロシア人が列につこうとして、他の貧民たちに追い返されるのを見た。中國人だけだって足りないのに、というのである。「彼は歩きながら袖で鼻水と涙を拭いていたが、時々私たちの方をふり返った。その眼には妬ましさと怨めしさがあった、悔恨もあったかも知れない——」

第二話は三九年九月、第一話から二十年近く經って、作者が英國に向う船上の話である。作者が乘船した當日、ドイツのポーランド攻擊が始まり、翌日に英佛兩國の對獨宣戰が報じられる、という狀況下での旅だった。九龍で乘船した船がサイゴンでフランス海軍に徵用され、別のフランス船に乘り換えた後には、開戰を知って下船してしまった者も多く、三等船客は蕭乾を含め三人しかいなかった。手閒を省くために、彼等も一等船室の食堂で食事をすることを許された。乘客たちはスピーカーの傳える戰爭のニュースに耳をそばだて、將來の不安をつのらせるばかりで、歐州航路の一等船室という華やかさはどこにもなかった。その中で三人の三等船客の一人である、亞麻色の髪をし、顏中そばかすの若者だけが、喜々として跳ねまわっている。作者がその理由を尋ねると、彼は、自分は戰爭を待っていた、ヒトラーがチェコに進駐した時から待っていた、それがかなった、という。思いがけぬ言葉に、なぜ戰爭を喜ぶのか、と詰問するように尋ねた作者に向って、若者はこういう。自分の母は白系ロシア人のダンサーだった。父親は知らない。米國の水兵だったかも知れないし、ノルウェーの商人だったかも知れない。とにかくそうして生まれた自分は無國籍

人だ。それが今、國籍のある人間に變るのだ。平時にはそれはできない、しかし戰爭になれば、男の足りないフランスは、傭兵を募集するだろう。船がマルセーユに着いたら、自分はすぐ應募する。

インド洋の波を見ながら「私は一人の國籍を持たぬ青年が、鐵かぶとをかぶり、濕ったマジノ線の塹壕に蹲って、待機している姿を頭に描いた。もし決死隊が募られれば、彼はきっと眞先に名乘り出、手柄を立てるだろう。しかし彼が足の下に踏まえているのは彼の國土ではなく、フランスは彼の祖國ではない。彼は祖國のない人間なのだ——」

僅か二ページ强の挿話だが、革命のロシアを逃れて來た末に、上海あたりで外國人相手の娼婦となったのであろう母親から生まれた、この青年とその悲哀が、讀む者に鮮明な像として傳わる。

第三話にもどる。ハルーン教授がケンブリッジ行きを强く勸めて歸った夜、蕭乾は睡眠藥を三回飲んだが効かなかった。夜半まで、さまざまの「忠告」が蛇のように彼の心にからみついて離れなかった。眼を閉じると、あの破れむしろから突き出ていた、行き倒れた白系ロシア人の足が、繪のように頭に浮かんだ。「搖りかごの中の赤ん坊も惡い夢でも見ているようだった。わけもなく急にすすり泣く、その訴えるような泣き聲の中に、私は『ぼく國籍が欲しいよ』という聲を聽いたような氣がした。」翌朝、彼はハルーン教授あてに、むだ足をさせたことになって濟まないが、考えは變らない旨の置き手紙を殘して『中國文摘』編集部へ行く。そして八月、地下黨の準備した「華安號」で、建國前夜の北京に向かった。

「三十年の寒暑が過ぎた。それは靜かでもなく、平凡でもない三十年だった。もっとも絕望した時でも、私は生命のあの大十字路で自分が足を踏み出した方向を後悔したことはない」と彼は書いている。[16]

四

「靜かでもなく平凡でもない三十年」と、ここでの作者の書き方はさり氣ない。あるいは、七九年五月という時點では、彼の口はここまでしか開かなかった、という方が正確かも知れない。しかし、蕭乾自身も、時の經過と「開放」の進展とともに、よりはっきり、具體的にその體驗を語るようになる。それらによって、彼がその後たどった跡を見ると、「三十年の寒暑」という言葉の重みがわかる。

歸國した蕭乾は『人民中國』英語版の副主編となる。

「反革命鎭壓、土地改革、三反、私はいずれにも胸いっぱいの熱情で參加した。この東亞病夫のためにうみを出し、傷をえぐり、つもった垢をきれいに取り除いているのだ、と感じた。一九五六年にはマルクス・レーニン主義の學習に參加し、革命との關係がいちだんと深まったと思った。[17]」

注(1)でふれた土地改革を描いた長篇ルポルタージュ（特寫）「土地回老家」は、こうした中で書かれたものだった。これはただちに十一カ國語に譯された。しかし、この本は初めから外國人に讀ませることを意識して書かれたものだったらしい。蕭乾は七九年に書いた文章で、建國後の數年は專ら外國人向けの文章を書いていたと述べ、外國人のために書いたものをもう一度國內に持って來るのは、どうもしっくりしない、という。

「それ（「土地回老家」）が上海『大公報』に連載された時、先ず私が讀み續けられなくなった。その味はイギリス人に『リンガフォ

ン』を讀ませるようなものだったかも知れない[18]」

そして、彼は前に引いた「革命との關係がいちだんと深まったと感じた」という文章にすぐ續けて、こう書いている。

「しかし、一年もたたぬうちに、嵐が私の身邊にも吹き寄せた。九龍のあの眠られぬ夜に恐れた狀況が、はたして發生した。」

いうまでもなく「反右派鬪爭」を指している。[19] また、こうもいう。

「不幸にして、中年で劣等公民に落ち、また誰にでも叱られる人間になった。[20]」

「五七年夏に私が大樓で鬪爭にかけられた時、善良な人までが牙をむき出し爪をふるうようになり、誠實な人までが眼も伏せずに嘘をいい始めるのを見て、私は絶望した[21]」

蕭乾は、三年前に文潔若と結婚していた。「彼女が私の唯一の支柱となった。[22]」彼女は心身にわたる過勞のためであろう、この年の九月死産する。[23]

そして六六年、「文革」が始まる。「右派」の帽子は、六四年國務院文化部黨委員會によってはずされていたが、[24]「帽子を脱いだ右派」だった蕭乾に、もう一度嵐が吹き寄せることになる。

「獨白」で、彼は反右派の時はまだよかった、屈辱は受けたが、拘禁も「皮肉之苦」もなかったし、「株連」もなかった、と書いているが、[25] これはそれとの對比で文革の非道さをより强調するためのもの、と讀むべきであろう。

彼は六六年八月には家を燒かれて原稿・手紙・資料等一切を失い、[26] 九月、湖北咸寧の向陽湖畔の五七幹校に送られる。[27] 七二年には幹校における「雙搶」（搶收・搶種、收穫・種子まきを急ぐ）によって心臟を痛めた。名譽回復は七九年二月である。

この間、彼は自殺をはかったことがある。「絶望の中で、私は彼女（文潔若夫人）にこっそり提案した、いっしょに死のう、と。彼女はきっぱりと言った、いいえ、生き續けましょう、生きてこの惡魔どもの滅亡を見とどけてやりましょう[28]」

この文章では、彼は夫人の言葉で自殺を思いとどまったように見えるが、八五年に書いた文章では、こう書いている。

「あの頃、少なからぬ人にとって、死ぬことは生きていることよりもずっと美しく、吸引力を持っていた。私もほとんどその列に加わるところだった。家がめちゃめちゃにこわされ、長年苦勞して集めたヨーロッパの版畫が粉々に引き裂かれたのを見、『三門幹部』の文潔若が三角帽子をかぶせられ、中庭の荷車の上に引っぱって行かれて吊し上げられるのを見た時、私は自分のまわりのこの世界に對する興味を失った。

六六年八月下旬、私はこの世に留まり續けるべきか否か晝も夜も考えていたような氣がする。その後、考えは次第に世の中を離れる方に傾いた。牛小屋にいた時、便所に行くたびに、私は死の方法と方式を調べていた。どの管ならベルトを掛けても大丈夫か、もし跳び降りるとすればどこから跳ぶか。文潔若が機關の中庭の荷車に連れて行かれて吊し上げられたあの午後、私はたしかに五階から跳び降りたいと思った。しかし私はまたこうも思った。一、三人の子どもを殘してどうする。二、萬一死ねないで障害が殘ったら、それこそどうする？

しかし死の考えはやはり私にまといついて離れなかった。死は滔滔たる雄辯で反問して來た、お前が細々と息を長らえていたところで、子どたちに何で役に立つ？　むしろ彼等を卷き添えにするでは

ないか？　こうして八月二十三日の夜、私は一瓶の睡眠藥を飲み、白乾を半瓶流し込んだ[28]」

しかし、彼は生命を取りとめた。同じ文章の中で、彼は運ばれた隆福醫院が、當時しばしば見られた例のように受入れ拒否もせず、また受入れてもいい加減にお茶を濁すというのでもなく、眞劍に胃の洗滌をしてくれたことに感謝し、さらにこう言っている。

「私はさらにここで自分の見方を一つ述べておきたい。文革についていえば、自殺と他殺とには本質的な區別はない。赤い恐怖が、生きる術もなく生き續けたいとも思わないところまで人を追いつめる時、死は唯一の解脫となる[29]」

五

「往事三瞥」で、それでもあの選擇を後悔しなかった、という「もっとも絶望した時」という言葉には、ごくかいつまんで見ただけでも、これだけの内容がこめられていたのである。

このことから「往事三瞥」の末尾をきれいごとに過ぎるとするのは、讀者の自由であり、一つの見方である。たしかに、『人民日報』にこれが載った時の讀者からの反響が前述のようなものであり、蕭乾自身が何度か説明を加えたということ自體、ここに表現された文章と彼の内面との間に、ある種の隙間があったことを示している、ということはできるだろう。私も先に、七九年五月という時點では、蕭乾の口はここまでしか開かなかった、と書いた。蕭乾自身も「この六年は私の主觀の雪どけの過程であった[32]」と書き、また他の場所では以前に書いた文章の例を引いて、自分の「魂の深部」にある種の怖れが殘っていたことを認めている[33]。

「往事三瞥」を書いたのは七九年五月だが、この年の「初夏」、彼は九月訪米の通知を作家協會から受けている[34]。五〇年九月、劉寧一を團長とする訪英代表團の一員となる豫定で、周恩來の接見まで受けながら、出發の前夜になって、代表團は豫定どおり出發するが蕭乾については「不要去了」という電話によって取消されて[35]以來、約三〇年ぶりの外國行きの話だった。彼が出發するまで及び米國での「步步設防[36]」ぶりは、以下の文章にくわしい。

「往事三瞥」を書いたのと、右にいう「初夏」との前後關係は不明だが、米國行きの話の方が早ければ、それが「往事三瞥」に影響しなかったと考える方が無理だろう。人の心はそれほど強いものではない。また訪米の話が出た方が後であったとしても、まったく自由に心境を吐露できるほど、當時の彼の心が開かれてはいなかったことは同じである。しかし、それによって、「往事三瞥」で彼が述べたことを嘘とし、政治的發言として無視し去るとしたら、それは文學者の表現という行爲に對するあまりにも卑俗な見方であり、逆の意味で「政治的」な見方であって、かえって作者の内面の眞實から遠ざかることになる、と私は考える。

むしろここで第一に讀みとるべきものは、知識人を含めた中國の人民にとって、國家ないし民族という問題が持っている意味の大きさであろう。「往事三瞥」の第二話の冒頭、九龍で乘船したアラミス號がサイゴンでフランス政府に徵用され、別の船に乘り換えたことが出て來ることは前にもふれたが、この時に、三等船客であった蕭乾たちのみならず、等級に關係なく中國人乘客が受けた差別と屈辱を、彼は「坐船犯罪記[37]」で書いているが、「未帶地圖的旅人」で、蕭乾はこの作品にふれて、暗黑の時代の各側面を、植民地主義とはどんなものだ

ったかを、當時中國人であったことの不運を、若い世代に見てもらいたい、といい、國家は、日頃それと氣づかず恩惠を蒙っている空氣や日光のようなものだ、それがなくなった時にはじめてその意味に氣づく、植民地・半植民地あるいは外國で暮した者には、今日の中國人であることがどんなに昔と違っているかがわかる、という。[38]

蕭乾は、米國に留學した子息に、修士をとったら必ず歸國せよ、といったという。[39] 子息がそれに從うかどうかは子息自身の問題だが、[40] 彼自身としては、四九年に行ったのと同じ選擇を、子息にどういう道を選ばせるか、という問題に關して、くり返したのである。

人によっては、ここに、その國家によってあれだけの苦しみをなめさせられたにもかかわらず、なおもそこに思いを寄せ續ける、舊世代の古さを見るかも知れない。しかし、若い世代への舊世代の「お說教」にもなりかねない蕭乾の右のような言葉を、そうならないところで支えているのは、「白華」にはなりたくないという思いの切實さ、いいかえれば彼がかつての外國での生活で事あるごとになめて來た「中國人であることの不運」の思いである。それは、北京の東北隅での幼時の貧しい生活とともに、彼の原體驗といえるものであった。國家に對する彼の思いを簡單に否定するよりは、前にも述べたように、むしろそこに半植民地時代から生きてきた、中國の知識人の思いの一端を見るべきだろうし、さらにまた、それと表裏をなして、今から見れば單純に過ぎたかも知れぬにせよ、新生した祖國に對して明るい誇らかさを抱き得た時代とその時代の持っていた可能性への愛惜の思いが強く生きていることを見なければなるまい、と私は思う。

社會主義そのものについても、彼は「改正之後」でこういう。近年よく頭に浮かぶことに、もし五〇年代からずっとこういうやり方でやっていたら、つまり、實際から出發し、一人の人間のひらめきによるようなことをしないでいたら、今日の國家と世界はどうなっていただろう、ということがある。「誤った路線は我々自身だけでなく、世界の足を引っぱってしまった」。五〇年代初期、對外宣傳にたずさわっていた彼のところには、世界各國から毎日手紙が寄せられていた。あの、あらゆる皮膚の色をした讀者からの手紙は、どんなに中國革命へのあこがれに滿ちていたことか。それが七〇年代、外國語文獻翻譯の部署にもどった彼が見たのは、「六〇年代に大量の第三世界が植民地主義の鎖を脫して、獨立國となった時、本來左に向くはずのいくつかの國家が、右へ行ってしまったことだった」。八三年以降東南アジアを訪れて見ると、そこには少なからぬ人々が今なお「革命」と「文革」とをイコールで結び、少しでも赤い色をしたものを、すべて洪水猛獸と見なしていた。今、世界が注目している中國式の社會主義が、世界の人民に稱賛され、羨まれるものになるか、それとも彼等が恐れて逃げるようなものになるか、それは第三世界の方向に關わり、人類の方向に關わる問題だ。[41]

彼等が今日の國家あるいは社會主義に寄せる思いは、建國直後のように單純なものではなく、何らかの程度においてアンビヴァレントな、あるいはもっと多くの矛盾を含んだ複雜なものたらざるを得ないが、その矛盾する側面の、どれか一つのみを單純にホンネとし、他方をタテマエとして無視するのではなく、その複雜さそのものをそれとして認めるのでなければ、彼等の心には近づけず、またそのアンビヴァレンスに耐えている彼等の強靱さ、ある意味でのしたたかさを理解することもできない。それでは中國現代文學の性格のある重要な一面を見落すことになる、と思うのである。

以上に見たのは、いわば一つの大狀況における蕭乾の選擇である。もちろん人間には大狀況のほかに、個人の日常レベルに至るまで、無數の小狀況がある。それらの小狀況における選擇の積み重ねは、ある面において大狀況の選擇を決定する力を持つであろう。大狀況におけるそれを論ずるのみで、小狀況におけるそれを無視すれば、少なくとも前者が後者によって十分に裏づけられないならば、文學として粗いものになってしまうことは承知しているつもりである。しかし、反面では、大狀況における選擇は、小狀況の選擇では日常性の蔭にさり氣なく隱れてしまいがちの、作家の氣質や性格の特徵を、時により鮮明に浮かび上らせる。從來の中國現代文學研究においては、大狀況におけるそれは、ともすれば、「歷史の必然」の中に塗りこめられがちであって、個人の內面における選擇の契機とそのあり方が語られたり論じられたりすることは必ずしも多くなかった。それがもっと廣く深く明らかにされることは、小狀況の持つ意味もより鮮明にするのに役立つ。そしてそれが積み重ねられる時、中國現代文學史は、はじめて中國革命史の文學版や逆に現象だけの作品・流派の羅列でもない、それ自體の立體的構造を明らかにして來るのではないか。

蕭乾の足跡も、そうした問題を考えるための、重要な例の一つを提供してくれるものではないか、と思われる。小論の扱ったのは、その一斷面に過ぎないが、それでもこれが、何らかの意味で以上のような問題を考える手がかりに通ずる一つのケース・スタディたり得ていれば幸いである。

注(1) 私の知る限り、翻譯には早く宮崎世民譯『土地農民にかえる』（原題「土地回老家」一九五〇作）一九五三、ハト書房、があるだけで、しかもこれは、作品としてよりも、中國の土地改革の狀況を知るのに好適の材料として譯された傾きが強い。蕭乾の「代序（著者から譯者への手紙）」がついてはいるものの、譯者の「あとがき」はもっぱら土地改革についての說明に終始し、作家蕭乾については何の說明もない。一九五〇年代の日本におけるこの分野のすぐれた仕事である、『中國新文學辭典』（中國文學研究會編、五五・一一、河出文庫）にも、蕭乾の項目はない。蕭乾の人と作品がまともにとりあげられたのは、雜誌『早稻田文學』八六年六月號の特集「脈動する中國文學」の中に、「歸依」「栗」の二篇の翻譯（ともに文潔若・鈴木貞美共譯）と文潔若「蕭乾について」が載ったのがはじめてである。ただし、その文潔若女士の文章も、夫人であるための禁欲もあってか、略歷の紹介にとどまる。

(2) たとえば、C.T. Hsia: A History of Modern Chinese Fiction, 1961, Second Edition 1971, Yale University Press. 中國語版は夏志清原著、劉紹銘他共譯『中國現代小說史』七九、友聯出版社、は、第二編第五章「三十年代の左派と獨立作家」で、沈從文が『大公報・文藝』の編集者として京派のリーダーとなり、「彼の指導の下で、この週刊は前衛的であると同時に反共の、重味のある批評紙となった」と書き、同紙に作品を發表した主な作家數人の中に蕭乾をあげて、「一九三九年、蕭乾は沈從文の後をついで編集者となり、同樣に詩と散文の高い水準を維持した」という（2nd. Ed. p.136. 中國語版では一一三頁）。この本自體は、中國できわめて狹い政治的評價が支配的であった時期に、それへの反撥をこめて書かれた本であるとしても、文革後の中國で一部の讀者、研究者にこの本が從來の文學史と違う魅力を持ったものとして受けとられたらしいことを考えると、こういう記述の持つ一面性は、やはり指摘しておかねばならないであろう。

(3) ここで「精神史」という言葉を使い、文學史・思想史等の言葉を避けたのは、文學史・思想史という言葉が與えがちな、すでにでき上ってい

るイメージを避けたいからである。現在の私の主たる關心は、できあがった作品そのものよりも、もう少し、作品を生み出す作者の内面自體に向いている。それは、思想という言葉を廣く考えれば、作者の思想と呼んでもいいかも知れないものだが、一方で思想という言葉が、ともするとすでにある完成された體系を豫想させがちであるのを避け、個人が、その遭遇する現實の中で、考え、選擇し、行動する、その發想・思考方法・行動樣式等を含めた、もう少し作者の個人的領域に屬するものに即して考えたいのである。

(4) 以下の敍述の便宜のために、先ず蕭乾の經歷を簡單に述べておく。北京東直門の門番をしていた父（漢族化したモンゴル族）の「遺腹子」として生まれる。母とともに父方の親戚に身を寄せ、貧しさの中で、絨毯工場・北新書局等で働きながら、小・中・高校に學ぶ。北新書局時代、中國現代文學・外國文學にふれた。高校時代、五・三〇後の政治的空氣の中で共産主義青年團に加入、張作霖政府による逮捕を經驗、この時は釋放されるが、北伐後の二八年國民黨にマークされて汕頭に逃れ、二九年北京にもどり、燕京大學國文專修班に入る。この頃後に出て來る楊剛を知り、彼女から革命運動への復歸を働きかけられるが、「私がなりたいのはもはや革命家ではなかった。……革命の前に私が提出したのは白紙答案だった。」（後出「一本褪色的相冊」）三〇年輔仁大學英文系本科に轉じ、雜多なアルバイトのほか、米國人經營の『中國簡報』（China in Brief）とくにその文藝面の編集を擔當、この仕事を通じて沈從文を知った。三三年燕京大學新聞系に轉じ、ここでエドガー・スノーを知り、現代中國短篇集『Living China』（中國語名『活的中國』）の編譯を手傳った。一方「蠶」以下短篇を發表し始める。卒業後『大公報』に入り、抗日戰開戰前後にかけて、天津・上海・昆明・香港で同紙「文藝」副刊を編集した。三九年ロンドン大學東方學院（School of Oriental and African Study）の中國語教師として渡歐、一方『大公報』にも記事を送る。四二年同大學を辭し、ケンブリッジ大大學院に入學するが、四三年、第二次大戰後半のヨーロッパで記者に徵することになる。四六年歸國、『大公報』につとめる一方、復旦大學新聞系教授となる、四八年十月香港に移って『大公報』の革新に參加、四九年、人民共和國建國直前の北京にもどった。建國後は英文版『人民中國』の副主編や『譯文』『文藝報』の編集委員等をつとめるが、五七年「右派」とされ、文革でも迫害された。七九年名譽回復。

蕭乾の年譜としては、梅子・彥火「蕭乾年表簡編」（以下「年表簡編」と略稱）と、鮑霽「蕭乾年表」（以下「年表」と略稱）がある。前者は彥火『當代中國作家風貌』八〇・五・香港・昭明出版社所收の「進行第三類接觸的人（蕭乾・畢塑望赴愛荷華過港側記）」に附載。末尾に「八〇年一月三日―五日梅子初稿、八〇年一月二十日彥火增訂」とある。同書所收のものは七九年まで。のち八一年まで補訂して、『中國現代作家選集・蕭乾』（八三・一、香港三聯書店）及び『蕭乾選集』（八三―八四、四川人民出版社、以下『選集』と略稱）第四巻にも收める。後者は鮑霽『蕭乾作品欣賞』（八六・八、廣西人民出版社）所收。これは八三年まで。全體として前者よりやや切りつめてあるが、よりくわしい部分もある、たとえば「年表簡編」は六四年右派の帽子をはずされた項のあと七八年に跳び、文革期にまったくふれていないが、「年表」では六六・六九・七二年の項がある。

彼自身が自己を語った主なものとしては、「憂鬱者的自白」（三六）「未帶地圖的旅人」（七九）「一本褪色的相冊」（八〇）その他があり、『選集』第三巻に「自剖」としてまとめられている。

(5) 「往事三瞥」『人民日報』七九・五・二八。『選集』第三巻、四五二頁。

(6) 『中國文摘』については、主編龔澎という（「年表」）以外未詳。

(7) したがってこの部分だけ見ると「前年」とあるのとくいちがうし、ケンブリッジ大からの招聘も四七年のことのように見えるが、「年表簡編」

「年表」ともケンブリッジの招聘を四八年とする。「楊剛に勵まされて」とあり、楊剛が歸國（四四年から『大公報』特派員を兼ねて米國に留學）したのは四八年というから、この記述は四八年のことになる。蕭乾の中で、家庭問題から『大公報』の改革、ケンブリッジ大の招聘は連續した事件であったため、こういう記述になったものであろう。

(8) 楊剛については、『楊剛文集』（八四・七、人民文學出版社）があり、年表、蕭乾の後記のほか、回想記六篇を附載。また『新文學史料』八二年二期にも關連資料がある。兩者とも收める蕭乾の「楊剛與包貴思」は、クリスチャンである燕京大の女性教授包貴思（Grace M. Boynton）と、コミュニストであった楊剛の間に成立した信頼と友誼を語り、人間・思想についての蕭乾の幅廣い理解もうかがわせる佳篇である。

(9) ドイツの占領から解放されたチェコスロヴァキアでは、大戰中のロンドン亡命政權を組織していたベネシュを大統領とし、四六年五月の總選擧で第一黨となった共産黨のゴットワルトを首相とする民族戰線連立內閣が組織されていたが、戰後國際政治の變化の中で、左右の對立が次第に激化した。四八年二月、治安政策をめぐる對立から、非共産三黨の閣僚十二名が辭表を提出、內閣を總辭職に追いこもうとした。これにより、戰後フランス・イタリア等で見られた、連合政府からの共産黨の排除が意圖されたものであった。これに對し、勞働組合等の激しい街頭デモを背景に、共産黨はベネシュに十二名の閣僚の辭意を受理することを要求、ベネシュは內亂を恐れてこれを容れ、ゴットワルト內閣は改造によって存續した。この後、五月には人民民主主義共和國憲法が成立、また總選擧で共産黨を中心とする國民戰線の單一名簿の候補者が八九パーセントの支持を得、新憲法への署名を拒んで辭職したベネシュに代ってゴットワルトが大統領となる。この事件は、チェコスロヴァキアが決定的に社會主義圏に入ったものとして、西側に大きな衝擊を與え、以後東西の冷戰はいっそう激化した。（この頃、主として『岩波講座・世界歴史二九』七一・九、及び『世界各國史一三・東歐史』七七・六、山川出版社による。該當個所の執筆者は、前者が齊藤孝氏、後者が木戸蓊・伊東孝之兩氏。さらに詳細はF・フェイト著、熊田亨譯『スターリン時代の東歐』七九・六岩波書店、とくに第三章第六節「ブラハの《クーデタ》」参照。

(10) ミンドセンテイ（當時の日本における呼稱ではミンゼンテイ、ここでは前掲『東歐史』における呼稱に從う。）樞機卿事件及びその背景にあった人民民主主義體制とカトリック教會との矛盾・對立の樣相についてよりくわしくは、F・フェイト著、村松・橋本・清水譯『民族社會主義革命――ハンガリア十年の悲劇』五七・五、近代生活社、または前掲フェイト『スターリン時代の東歐』（この事件に關しては兩者ほゞ同一內容）参照。

(11) 「據J・馬薩里克遺書」『觀察』四巻七期（四八・四）。また『選集』三巻所收、ただし『選集』では、ヤンのイニシャルであるJを丁と誤植している。なお『觀察』は上海で發行されていた總合週刊誌（儲安平主編）。蕭乾は四六年三月ロンドンを發って夏上海に歸り、『大公報・文藝』編集に復歸するが、實際には國際問題を擔當し、それに關連する社說などを書く一方、四六年から四八年六月まで復旦大學英文系及び新聞系の教授をつとめていた。

(12) 「一個樂觀主義者的獨白（代序）」八一・九、『選集』一巻、一二頁。以下「獨白」と略稱。

(13) ソ聯の義勇隊については、たとえば郭沫若『洪波曲―抗日戰爭回憶錄』第十三章「撤守前後」の一節「正義之劍」（邦譯は小野・丸山譯『抗日戰回想錄、郭沫若自傳六』七三・一、平凡社）参照。執筆當時の筆者の評價が前面に出すぎているが、事實そのものは参考になる。

(14) 前述のように四三年修士號取得を斷念してジャーナリストの仕事に專念して以來、彼はドイツのV1・V2攻擊下にあったロンドンに『大公

報』辦事處をかまえ、重慶に通信を送った。また四四年秋には米第七軍に從軍してライン戰線等を取材、四五年三月にはライン戰線から引返して、四月國際連合結成のサンフランシスコ會議を取材、さらに七月にはベルリン陷落後最初にベルリン入りした記者團の一員となり、引續いてポツダム會談も取材している。

(15) 一つの見解として前掲F・フェイト『スターリン時代の東歐』を引いておく。

「……（彼は）すべての人々から快活な現實主義の精神の持ち主として知られ、小さい祖國の市民と大いなる自由の理念にひとしく愛情をかたむけて來た……。共産黨は幸福と公正のいい知れぬ約束をいっぱいに內包する魅惑的なことば、《進歩》の名において、チェコスロヴァキアの數十萬のすぐれた市民たちをかれらの行動のなかにひきいれることに成功したが、マサリークもそうした《進歩》のためならば一身をささげる用意があったのである。しかし、マサリーク外相は、新しい政權がかれにむかって、人民に奉仕するのみならず、かれの過去と共感と友情を否定すること、すなわち、《西歐世界》をまるごと拒否し、暴力を承認し、あらゆる反對派を一掃し、ほしいままに肅清をおこなうことを要求しているのだと知ったとき、ついにくずれおちてしまった。」（同書二〇六頁―二〇七頁）

(16) 前掲「獨白」によれば、「往事三瞥」が發表されると、讀者から熱情あふれる手紙が何十通も來た。「ただ人々が讀みとれていなかったことが一つあった。一九四九年に私が歸る道を選擇したのは、革命に對する認識から出たものではなく、決定はある程度危惧の念を持ちながら行ったものだったのである。私は前にある道が平坦なものではなく、危險さえも含んでいるのをよく知っていたが、それでもあのように決めた、それは私が白系中國人（白華）になるのを恐れたからである。……當時、私の論理はこうだった。白系中國人になりたくなかったら、祖國という船にもどって、それと運命を共にせねばならない。海が靜かな時には、舷側にもたれて、溫い海の風に吹かれていよう。風浪に出遇ったら、いっしょに搖られ、吐き、さらには鹽からく苦い海水を飲まねばならない」（『選集』一巻一五頁）

「マサリーク遺書に擬して」などと合わせて「往事三瞥」を讀んで來た我々にとっては、多くの讀者が右の點を讀みとれなかったというのが不思議なくらいだが、これが『人民日報』に載った文章に對する中國の讀者の、少なくとも一九七九年という時點での讀み方のある傾向を示しているのであろう。

(17) 「獨白」『選集』一五頁。

(18) 「未帶地圖的旅人」（七九・四『蕭乾散文特寫選』代序）同書出版に先立って『當代』創刊號（七九・九）に掲載。『選集』三巻、三九三頁。

(19) 反右派鬪爭時における蕭乾批判の主要なポイントは、張光年「蕭乾是怎樣的一個人」（八月一九日に開かれた中國作家協會の蕭乾批判會議での發言）、『文藝報』五七年二三號（九・一五）に見られる。

(20) 「獨白」『選集』一巻八頁。劣等公民の原語は次等公民。同樣の言葉の例として、つぎのような文章もある。

「ある日彼女（近くに住んでいた女性）が、南の棟で子どもをぶっている音が、私の住んでいる東の棟まで聞こえて來た。『おまえ、大きくなったら何になってもいいけど、右派にだけはなるんじゃないよ』……あの頃、私は人下人あるいは等外人の味を十分味わった。」（後出「改正之後」『新華文摘』八五・一二、一五九頁）

(21) 「改正之後――一個知識分子的心境素描」（八五・四）、『現代人』八五年一期原載未見、『新華文摘』八五・一二轉載。のち散文、回憶集『負笈劍橋』八七・一〇、北京三聯書店に收める、同書では「略有補充」といい、事實後に見るように、未確認だが恐らく原載誌と同じと思われる『新華文摘』にない部分がある。以下その區別をするため『新華

文摘』にもある部分（この部分は『負笈劍橋』にもある）の引用は同誌のページを、『負笈劍橋』にのみある部分の引用は同書のページを示す。

(22) 「自序」（八一年春）、注(4)前掲『中國現代作家選集蕭乾』四頁。『選集』三卷にも收める。

(23) 同前。

(24) 前掲「年表簡編」及び「年表」等。

(25) 『選集』一卷、一五頁。

(26) 前掲「未帶地圖的旅人」「一本褪色的相冊」等。『選集』三卷、三五三頁、三二〇頁、三四九頁等。

(27) 前掲『中國作家選集、蕭乾』自序」『選集』三卷、四八四頁。

(28) 同前。なおこの個所、『中國作家選集・蕭乾』五頁では「不、要活下去、要活着看到這幫惡魔的滅亡」とするが、『選集』三卷四八四頁では、「……看到江靑這幫惡魔的滅亡」とする。「這幫惡魔」が誰を指すかについての詮索や「誤解」を慮ったのであろう。

なお文潔若女士は、中華民國時代の外交官であった父君に連れられて、幼稚園（白金幼稚園）からの二年間を東京で過ごし、のち淸華大學英文科卒。五〇年以來人民文學出版社で日本文學の研究・翻譯・編集に從事。八五年六月から一年間、日本國際交流基金の招きで東洋大學外國人研究員として來日された。作家協會會員、日本文學研究會理事。（『東洋大學校友會報』一四七號、六六年五月所載の紹介及び八六年六月十四日、同女士の筆者に對する談話による。）

(29) 前掲「改正之後」前半は『新華文摘』一六一〇頁。後半「六六年八月下旬」以下は『負笈劍橋』九頁―一〇頁。八一年の『中國作家選集・蕭乾』自序」以後、八五年、八七年と、作者が重い口を次第に開いて來た經過を見ることができる。なお文中「三門幹部」とは、家庭・學校・職場の三つの門を通過して來ただけで、革命工作の試練を經ていない幹部をいう。

(30) 前掲『負笈劍橋』一〇頁。

(31) このことについて、前掲「獨白」のほか、「改正之後」にも同樣の記述がある。『新華文摘』一六二頁。

(32) 「改正之後」『新華文摘』一六〇頁。

(33) 「漫談種種二、解凍」『負笈劍橋』三七一頁―三七五頁。原載は『讀書』八五年五期、原題は「一封信引起的感觸」。

(34) 「改正之後」『新華文摘』一六三頁。

(35) 同前。

(36) 「改正之後」の該當個所である第四節の小題。

(37) 執筆は三九年九月二十日、『選集』二卷三一二頁―三二三頁。

(38) 『選集』三卷三八二頁。

(39) 前掲、文潔若夫人の筆者に對する談話による。

(40) 文潔若女士は、ただ少年だった文革當時、兩親の體驗を實際に見た彼は、あまりにも傷ついてしまったので……とだけ語った。

(41) 『新華文摘』一六〇頁―一六一頁。『負笈劍橋』六頁―一二頁。前述のように、後者には約一ページ分の加筆があるが、ここに要約した部分については異同はない。

付記 本稿中の二、三の疑問點について、蕭乾・文潔若夫妻に出していた質問の手紙に對して、本稿入稿後に回答をいただいた。ここに記して感謝する。またその際、「J・マサリークの遺書に擬して」を書いた當時の背景についても、貴重な敎示をいただいた。本稿の範圍では訂正を必要とはしないと思うので、その點については、他の機會にあらためて論ずることにする。